

大分県の民俗学の歩みと『大分県地方史』

小玉 洋美

私と民俗学の出会いといえば、高校時代にさかのぼります。戦後すぐの新制杵築高校で郷土研究部に入り、多くの先生方、特に藤原正教・入江英親両先生にご指導いただいたのが始まりと聞いていいでしょう。藤原先生は杵築の納屋地区を中心とした漁村の民俗を調査されていました。また入江先生は杵築の民俗芸能や信仰などを調査されましたが、当時大分県内では数少ない考古学の専門家としても活躍され、私たち生徒をあちこちの発掘につれていってくれました。このような若く熱心な先生方の指導で部員の数も多くなかなか盛況でした。とにかく皆元気でした。

当時一緒に活動していた一人に佐藤節さんがいます。のちに大分県の民俗学方面で活躍されたことはよく知られている方です。節さんのお父さんは佐藤悌さんといい、お医者さんでしたが民俗学にも造詣が深く、中央で出されていた民俗関係の雑誌『民間伝承』にも報告を発表されたりしていました。また節さんのお兄さんの晔さんも民俗学・考古学の研究者でした。節さんの家にはよく遊びに行き、いろいろと話を聞いたものです。

その後私は熊本大学法文学部に進み、ここで民俗学の大家原田敏明先生につき本格的に民俗学をやることになったのです。ここで少し、戦後の大分県民俗学の歩みについて、私の知る範囲で述べてみましょう。

昭和二五年、当時東大教授でした堀一郎先生が、民俗学研究所の「離島村落調査」のために来県し、国東半島の姫島の調査を行っています。この時、先に話しました佐藤悌さんにお会いになり、「小一郎神」の話を聞いて注目しています。昭和二七年には県立臼杵中学校長だった祝宮静さん（宇佐市出身）が国の文化財保護委員会の民俗資料担当技官となっています。その後の大分県の民俗調査にずいぶん御尽力いただいたのではないかと思います。昭和四八年に祝さんが出した『民俗資料入

門』は、その後の民俗調査の手引きとなったわけです。

こうして少しずつ本格的な民俗調査が行われたところ、「大分県民俗学会」が組織されたのですが、会としてあまりまとまった活動は無かったようで、昭和三十一年十月には「東九州考古学会」と合体して「大分県考古民俗学会」として再発足しています。

このような中で注目されるのが、昭和二十九年にNHKの大分放送局が行った郷土資料調査ではないでしょうか。調査員は久多羅木儀一郎・半田康夫・加藤数功・賀川光夫・松岡実・立川輝信・田吹繁子という方々で、直入・朝地・佐伯・宇目・庄内など県内各地の市町村を、毎月一回二泊三日の日程で現地調査をしていきました。その成果は毎月第二土曜日の午後五時半から三〇分間放送され、相当の反響をよんだものです。同調査委員会編では、『朝地町と佐伯市の調査報告書』や『県下中行事一覧』などの刊行もしています。

ちょうどこの年の十月ですが、『大分県地方史』の創刊号が出ました。この号には半田康夫先生の「谷村の大将軍祭」の調査報告が掲載されています。その後『大分県地方史』には民俗関係の論文・報告が次々と発表されるようになります。ここに地方史の第一〇〇号がありますが、創刊号からの総目次が出ています。民俗関係の分を拾い出してみますと一二八編もあります。中には、三二号から始めて五三号までに一〇回にわたって掲載された染矢多喜男先生の「大分県の民俗芸能」や八七号から九七号にかけて、七回に分けて発表された安部弥右衛門さんの「羽出浦の歴史と民俗」もあります。

また六〇号から九一号にかけて、九回民俗特集号が組まれています。編集担当者は染矢先生と、後半は私が行っています。これにより県内各地の民俗や、年中行事・民具等の論文・報告が数多く発表されるようになり、各地で民俗を調査研究する人も増え、若い人の中にも民俗をやってみようという人も出てきたように思います。もちろん民俗特集号だけで民俗をやる人が増えたわけではありません。昭和三〇年代前半の、東京教育大の和歌森太郎先生を団長に実施された国東半島の民俗調査、国が全国で実施した三〇カ所・二〇〇カ所・一五〇カ所の民俗調査なども県内の民俗学研究者の増加の一因であったと思います。

民俗学の研究者が増えたとはいいますが、女性では、現在でも活躍されている金田信子さんがいらっしゃいますが、金田さんのあとを継ぐ女性の民俗研究者が出てこないのは残念です。中央で大分県の民俗を調査研究される女性の研究者はいるのですが、やはり地元の人が、地元の民俗を調査研究してもらいたいと思うのですが。

ところで地方史の編集を担当していたころ、少し気になる、ある意味でさびしさを感じる話を耳にしたことがあります。それは大分県地方史研究会は歴史の研究団体だから、民俗特集はあまり必要ないのでは、というものです。文献史学中心の人の意見だと思いますが、せっかく民俗を研究する人たちが増え、大分県の民俗学もこれからだ、と感じていた時期だけに、何かさびしさを感じたという次第です。

しかしいずれにせよ、『大分県地方史』の発刊により、発表の場ができたということは大分県の民俗研究にとって大変意義のあることだったと思います。

このほか、大分県の民俗学界をリードされてきた諸先輩の存在も忘れることはできません。これまで述べてきた方々ですが、中でも半田康夫先生と染矢多喜男先生は存在は大きかったと思います。半田先生は大分大学教授で、「中津の北原人形芝居」「古要神社のくぐつ」「県下の神社の祭礼」「神楽」などの調査研究で成果をあげられ、民俗調査の一つの指針を示された方です。昭和三十七年に刊行されました『大分県史料 民俗資料』は年中行事と人生儀礼ですが、先生は染矢先生とともに執筆の中心となっております。

染矢多喜男先生は、舞鶴高校に勤務のころは地名の研究をされており、生徒とともに調査した結果をまとめ『地名覚書』として本を刊行されています。昭和三十八年八月、半田先生が急逝されたからは大分県民俗学界の中心となり活躍されたことはよく知られています。民俗芸能の調査をはじめ、昭和四〇年代後半から五〇年代前半にかけて県教育委員会が実施したダム水没地区民俗調査などでは、調査団を組み、いつも中心となって若い人たちをリードしていました。また県下市町村誌の編纂にもかかわり、民俗調査の重要性を説き、この結果をこれまで民俗にあまりページをさくことのなかった市町村誌で、民俗は一つ

の編として構成されるようになったと思います。また県下各地の民俗調査報告書も出されるようになり、加藤泰信さんが中心となりまとめた大分市の国分地域・大内地域などの報告書は内容も本格的なものでした。

そして昭和五〇年代までの民俗調査の成果を集大成したのが、昭和六一年に刊行された『大分県史』民俗篇だと思っています。これも染矢先生が中心となっていますが、そのころは、これを執筆した小泊立矢・野崎一郎・小玉・松岡謙一郎・金田信子・若杉昌昭・河野了・段上達雄の各氏が大分県民俗学研究の中堅となっていたといえるのではないのでしょうか。

「宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現県立歴史博物館）」の開館も忘れることができません。開館と同時に赴任された段上達雄さんや染矢先生が中心となって実施した職人調査、国東半島の石工調査、祭礼行事の調査等は本格的な民俗調査として高く評価されています。段上さんは現在別府大学で民俗学を教えており、後進の育成に力を注いでおります。段上さんの後は菅野剛宏さんが民俗学の専門家として活躍されており、民俗をテーマとしたユニークな展示を手がけています。歴史博物館が今後大分県民俗学研究の一つの核になってもらいたいものです。幸いに現館長の岩井先生は民俗学がご専門ですので、その面からも大いに期待しているところです。

以上、「大分県地方史研究会五〇周年」にあたって、ごく簡単に大分県の民俗研究の流れを概観したのですが、『大分県地方史』の刊行が果たした役割を改めて痛感しました。しかし、一〇〇号以降の民俗関係の論文・報告は極端に減少し、内容もそれまでの地域の年配者に聞取りをしまとめるといふ型から文献資料を使ったものが主流を占めているようです。新たな民俗学の方角性を探る時期かも知れません。

最後に、民俗学研究を目指す若い人が出てくることを望んでいます。私と一緒に活躍した人たちも、すでに六〇代をこす人が大半です。地方史研究会に若い人が入らない、その結果高齢化、会員の減少といわれていますが、大分県民俗学界も同じことがいえそうです。

まとまりのない話となりましたが、大分県地方史研究会の発展を心から祈念申し上げます。